

営農ウィークリーNEWS

土壌診断結果の傾向と施肥の注意点

2018年に当JAに土壌分析装置を導入してから、今年の2月までに157点の土壌分析を行いました。その中で、いくつかの傾向が見られています。成分ごとに解説しますので、皆さんの施肥の参考にさせていただきたいと思います。



土壌分析装置

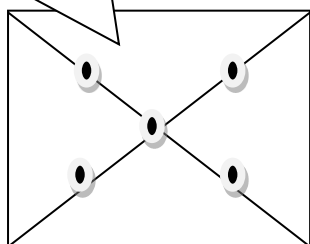
pH(ペーハー)	4.9以下は10点あり、野菜では生育不良が顕著でした。また、7.0以上の圃場も44圃場ありました。7.5を超えると鉄やホウ素の欠乏症状が出てきますので、石灰資材の施用には注意が必要です。水稻では、灌漑水の影響が大きいので、土壌のpHで問題になったところはありませんでした。
EC(イシー)	肥料の濃度です。特に硝酸態の窒素が数値に大きく影響します。1.0以上あれば、野菜は基肥なしで生育が可能です。ハウス栽培では残留窒素の多いところが見られました。
りん酸	花の大きさや、根張りの確保などに必要です。100mg/土壌100gあれば、十分ですが100mg以上の圃場が116点(74%)ありました。過剰障害としてタマネギの軟化玉や根こぶ病の発生助長などがあり注意が必要です。基本的にはりん酸成分の少ない肥料を選ぶのがいいでしょう。
石灰(カルシウム)	施用されていないか、施用量の少ない圃場では酸性が顕著でした。鶏糞を主体としている圃場ではカルシウムが過剰に蓄積され、施用してはいけない状態のものも多く見られました。
苦土(マグネシウム)	光合成に不可欠です。過剰害としてカルシウムやカリウムの欠乏症の助長があります。施設では過剰で施用してはいけない圃場が13点(8%)見られました。
加里(カリウム)	10mg/土壌100g以上あれば欠乏症は発生しません。苦土に比較してかなり多いと、苦土欠乏が発生します。適正な圃場が多くありました。

TAC information

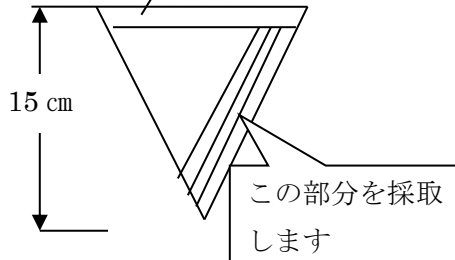
土壌診断は年1点無料です



圃場から、以下のように5ヶ所の土を取り乾かします



表土は除きます



測定できる項目は、pH、EC、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、りん酸、石灰、苦土、加里です。

5ヶ所から採種した土をよく混ぜ、乾かして、そのうち1~2合程度の量を、申込書とともにエリア担当や支店に提出ください。

組合員の方は、土壌診断は年1点無料です。2点目からは、1点につき2,000円となります。

J A 管内での肥料成分の過剰や欠乏によるさまざまな症状



レタスのタケノコ球;窒素肥料が過剰にあると発生しやすい。品種間差も大きい。



ハウレンソウの凍霜害;窒素肥料が過剰で生育が早いと発生しやすい。



トマトの石灰欠乏;土壌の乾きがひどいと発生しやすい。「畑のカルシウム」の基肥施用の効果が高い。



ナスの苦土欠乏;根の活性が低下してくると発生する。土壌への酸素供給が効果的。



ブロッコリーのホウ素欠乏;茎の一部がコルク状になる。休耕田の作付けで発生する。堆肥を施用していると発生しない。



ハウレンソウの酸性害;根がいじけて細根の先端部が丸くなる。このような状況では生育がストップしてしまう (pH4.9)。